川田喜久治 top

川田喜久治 作品展

「遠い場所の記憶:メモワール 1951-1966」

2008年11月17日(月)-2009年1月30日(金)

Kikuji Kawada "Remote Past:Mwmoir 1951-1966" November 17,2008-January30,2009

冬季休館 2008年12月21日(日)-2009年1月6日(火)





老人と子供A、新橋、1954

「遠い場所の記憶」メモワール 1951-1966

川田喜久治

僕の初めての写真発表は 1951 年と記憶するので、今年(2008 年)で半世紀を過ぎたことになる。ながいはずの時間がいま思うとそうは感じられない。

高校を卒業のとき、写真専門誌の「月例」に投稿したら、選者の目にとまり特選となった。この偶然がなかったら、僕はちがった人生をどのように歩いているのだろうか。

大学を卒業して、ウイークリー・マガジンのカメラマンになった。そこは文学と芸術を専門とした老舗の出版社で新宿の閑静なところにあった。これから週刊誌が全盛期に入ろうという時代である。天井の高い古風な編集室には大きな栗製の丸テーブルがあり、「ニューヨーカー」誌をいつも小脇に抱えたハンサムな副社長と熱狂的なクラシック音楽ファンの中年重役が指揮をとっていた。写真への注文も宇宙人からのサインのようだから、理解の手がかりはカンだけだった。グラビアも記事同様スキャンダラスな角度が求められたが、撮影の毎日がスポーツで流す汗のように爽快であった。写真を写すことは、きわめてフィジカルな作業であることを身をもって知らされたのである。

週刊誌グラビア時代の仕事は今回の集成から外すことにした。さしたる理由はないのだが、どこかでなにかが引っかかっている。 テーマと僕のからだの間で言葉にならない嘆きがつきまとうが、それは苦く懐かしいものばかりである。勤めて3年ほどのち、 フリーの写真家になった。その間、自分の意志で写したネガの山を眺めながら、これからの自分の写真を見つけようと思ったの である。

僕の写真のはじまり「初期のスタイル =beginning Style」は、この 15 年間(1951 年 -1966 年)の作品の中にあると思いつつ、気がつくまで半世紀もかかってしまったのは、自作を振り返らないというタブーを記憶の女神と交わしていたからなのです。「初めの作品のなかにしばしば終わりのないスタイルが潜んでいる」ことを女神ムネモシュネ MNEMOSYNE が囁いているようでもあり、また、「わたしたちは探求をやめてはいけないのだ。その探求の果てにもとの場所にもどり、初めてその地を理解するのだ」という声も聞こえるのです。

もとに戻るのも、その場所を理解することも、僕には関心のなかったことでした。しかし、あるとき、記憶の回路にトラブルを起す事件に出会い、深い霧の中に消えてしまうようなおのずから命の崩壊する過程を味わったのです。この世の視界の外に別の世界があることも感じられるのです。写真に封じ込まれた「遠い場所の記憶」から、自分のテーマの核心を探り当てておかないといけないと思ったのはその時でした。この作業を通し、いま、「終わりのないスタイル = Late Style」も考えて見ようとしたのです。

ちょうど、双眼鏡を逆さまにして覗いたときのように、写真は遠近法を活用した「押絵」と「だまし絵」のなかで生きつづけていたのです。それがいつのまにかライフサイズの生き物となっているのには驚きを隠せません。過去の記憶だけでなく、未来への記憶も同時に潜んでいることを知らせてきます。ここで末視感と既視感も体験できるのです。この累々たる写真がリアルなイメージを投げかけて来るのはそのようなときなのです。場所も時代も超えて。

もし、自分の「終わりのないスタイル = Late Style」もその中に見えるとしたら、タブーに閉ざされた記憶の箱をこの際開けてもかまわないのではないかと思ったのです。

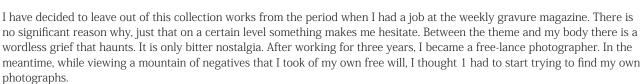
Remembrance of a Remote Past - A Memoir 1951-1966

Kikuji Kawada

I remember the first time I exhibited my photographs was in 1951 and since this year is 2008 that means over half a century has passed. When I think about it, this should feel like a long time but it does not.

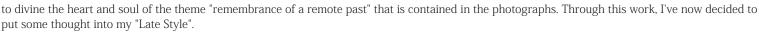
When I graduated from high school I submitted my work to the specialty photographic magazine "Getsurei". My submission caught the eyes of the judges and I won a special commendation. If it had not been for this chance occurrence, I wonder what kind of a different life I would have led.

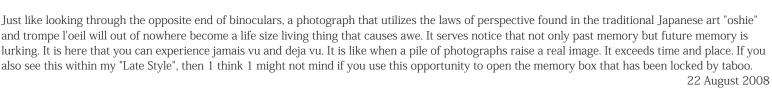
After graduating from university, I became a cameraman at a weekly magazine. It was a well established publisher who specialized in literature and the arts. Their offices were in a quiet neighborhood of Shinjuku. This was a time when weekly publications were about to enter their golden era. There was a large, round chestnut wood table in an old-style, high-ceilinged newsroom where the handsome vice president of the company (who always had a copy of "The New Yorker" under his arm) and a middle-aged executive (an impassioned fan of classical music) directed everything. Assignments for photographs were like a sign from an alien, and the only clue to understanding was instinct. Just like the news articles, there was a demand for gravure photographs that had a scandalous angle, but taking pictures every day was as exhilarating as building up a sweat from sports. I came to find out firsthand that taking photographs was quite a physical labor.



The start of my photographs or "Beginning Style" I think is within my works during the 15 year period from 1951 to 1966. That half a century has now passed before I noticed was because the taboo of not looking back at my own works had an agreement with the goddess of memory. "Often the late style is hidden within the early works," the goddess Mnemosyne seems to whisper. I also hear a voice that says: "We shall not cease from exploration and the end of all our exploring will be to arrive where we started and know the place for the first time."

I had no interest in coming full circle nor in understanding the situation. However, one time there was an incident that caused a problem with my memory circuit and it seemed like I was disappearing within a deep fog and felt like my own life was disintegrating. Outside of the purview of this world it felt like there was another world. It was at that time that I thought I had







松葉杖の子、池袋、1952



ガード、池袋、1954



セルフポートレート、 名古屋、1962

Translation by Kevin L. Dunn



原爆ドーム、広島、1962

フォト・ギャラリー・インターナショナル

108-0023 東京都港区芝浦 4-12-32 tel. 03-3455-7827 fax. 03-3455-8143 http://www.pgi.ac

月 - 金 11:00-19:00 土 11:00-18:00 日・祝日 休館 入場無料 **Photo Gallery International**

4-12-32 Shibaura, Minato-ku, Tokyo 108-0023 Lapan

Mondy-Friday 11:00-19:00 Saturday 11:00-18:00 Closed Sundy & National Holiday

























『今回、P.G.I. 個展「遠い場所の記憶 Remote Past Memoir 1951-1966」に出品しているオリジナルプリントによる自作の写真集は年代的には写真集「地図」をはさんで十五年間にまたがる作品だが、「遠い場所の記憶」の写真から、いまと未来への肖像をオブジェの中に再生してみようと試みたのだが・・・。』川田喜久治「オブジェとしての写真集」より抜粋(イメージは写真集からの抜き刷り)























